

『尊良親王御上陸地記念碑
(王無の浜)』

この記念碑は、黒潮町上川口国道56号線の王無団地前を過ぎ、国道より王迎団地への進入路の反対側の国道端に太平洋を背にして建っており、碑のすぐ下は王無の浜になっています。

国道はほぼ直線となっているため、すぐそばに立っているのに見落としていられる方が多いのではとの思いがします。



■記念碑の歴史

1939(昭和14)年、尊良親王の父・後醍醐天皇600年記念にあたり、幡東教育会は、有井庄司(二宮三郎左衛門豊高)・大平弾正の顕彰慰霊事業の一環として、尊良親王が着かれた浜

にこの記念碑の建立を行ったものです。

この碑の碑文は、郷土南朝史研究の最高資料とされるべきとの評価を受けている書「尊良親王と二忠臣」より引用したもので、題字は、時の高知県教育会長・佐々木行忠公爵の書です。

碑文は時の流れを感じさせ、判読しにくくなっていますので、文の紹介をします。

【碑文】

人皇第九十六代後醍醐天皇第一皇子尊良親王ハ元弘二年三月逆臣北条ノ爲メ土佐ノ幡多ニ遷サレ給フ。宮此ノ濱ニ着カセ給フヤ奥湊川領主大平弾正謹テ己ガ館ニ奉迎ス。有井ノ庄司二宮三郎左衛門尉亦来リ謁シテ忠誠ヲ誓フ。爾後兩人戮心協力宮ノ御帰洛ニ至ルマデ或ハ宮王野ノ山峽ニ米原ノ佗シキ假宮ニ宮ノ御憂憤ヲ慰メ奉リ日夜ノ忠勤ニ肝膽ヲ碎ケリ。茲ニ後醍醐天皇六百年式年祭ヲ迎フルニ当リ碑ヲ建テ其ノ忠魂ヲ傳ヘントス。
昭和十四年十一月十五日
幡東教育会建設
(尊良親王と二忠臣)より



戻る浜お着きの親王(想像図)

■尊良親王と王無の浜

尊良親王は、後醍醐天皇の第一子で、一宮と呼ばれていました。

元弘の変で北条幕府より、父の後醍醐天皇は隠岐の島に、尊良親王は土佐に流されることになりました。

尊良親王は1332(元弘2)年3月下旬、京より警固、侍従らを従えて、土佐国畑の「戻る浜」(現在の黒潮町上川口王無の浜)に着きました。

奥湊川の弾正は、一族を引き連れて、尊良親王をこの浜辺にお迎えしたそうです。

【二忠臣】

「戻る浜」で京より使えてきた警固、侍従と別れた尊良親王を、大平弾正は自分の館にお迎えし、この館が最初の仮御所となりました。

ほどなく、尊良親王の到着を待っていた有井庄司も、一族とともに仮御所にはせまじ忠誠を誓い、以来尊良親王は大平・有井の二忠臣に守られ、仮御所を転々とし、京に帰るまでの1年余りの歳月を過ごしました。

この二忠臣については、今後の「黒潮町の文化財」で詳しく紹介します。

【仮御所】

尊良親王の最初の仮御所は、大平弾正の館でした。

その後、尊良親王の身の危険を案じた二忠臣により黒潮町一の高峰「仏が森」の山腹に「王野仮御所」を造り住んでいましたが、「王野仮御所」での不自由でわびしい生活を二忠臣は恐れ多く思い、有井川上流の米原へ、3度目の仮御所を用意し移っていたいただきました。

○このシリーズに関するお問い合わせは、黒潮町教育委員会文化振興係(大方あかつき館内) ☎43-2110(直通)まで